

青年期における危機的体験を通じた成長

——他者からの受容感に焦点をあてて——

岩本 寛子

問 題

人には避けられない試練や危機的体験が訪れる。Parad (1965) は、「危機」を、発達の危機と状況的危機とに分けている。発達の危機とは、成長発達上避けることのできない危機である。一方、状況的危機とは、人生において偶発的に発生する危機である（小島, 2008）。日常場面において、このような危機に遭遇することは、珍しいことではない。むしろ、人には避けられない試練や危機的体験が訪れる。しかし人は、それらの辛い体験や試練をひとつの契機として、それに立ち向かっていく事によって成長が促進されると考えられる。

本研究で調査対象とするのは、青年期にあたる大学生である。青年期は、第二次性徴の発現とともに急激な身体発達が起こり、それまでの自己像が大きく揺れ動く。つまり、大人に向けての試行錯誤がなされる点で、本来心理的危機が生じやすい（下山, 1998）。しかし通常、青年はこのような様々な情動や葛藤を受け止め、悩むことによって成長していくと考えられている（福森・小川, 2009）。Erikson (1956) は、青年期の発達課題であるアイデンティティの確立の可能性は、すべて青年期以前の発達課題の順調な成就によるとしながらも、青年期の正常な発達過程における、「標準的な危機（自我機能の新たな拡大をもたらすような危機）」に着目している（宅, 2002）。また、鏑（1988）によると、Erikson における心理社会的危機とは、ライフ・サイクルの中で、次のプロセスに進むか、それまで経てきた発達の前段階に逆戻りするか、横道に進んでしまうかという意味の『岐路』ないし『峠』の意味で用いられているとし、それまで発達してきた心的体制が、発達の次に新しい心的体制に向かい、再体制化されていく時期として「危機」を捉えている。つまり、アイデンティティ形成への歩み自体が、危機との出会いによって引き起こされており、

「危機」は展開へも退行へも行く分岐点として概念化されている（宅, 2002）。

先に述べた「発達の危機」とは、この Erikson の発達理論に基づいている（小島, 2008）。つまり、人間の生涯の中で必ず直面し、それを乗り越えることで成長していく「発達の危機」を通して、青年は、アイデンティティの確立へ向かうと考えられる。さらに、小島（2008）によると、「発達の危機」は「状況的危機」と関連している。つまり、「発達の危機」と「状況的危機」は密接な関連を持っており、偶発的な出来事に見える病気や事故などが、実は発達上の葛藤や危機と深く関わっていることがあるとしている。したがって、どのような「危機」であっても、青年期において、深く悩むことが、個人にとっての「危機的体験」となると考えられる。そして、様々な「悩み体験」が重なり合って、青年期の発達課題であるアイデンティティの確立へ向かう、「発達の危機」となると考えられる。

一方で、町沢（1988）が「ほどよい刺激は、その生体の適応力を伸ばし、成熟を促すが、その人の素因を超えた刺激は、その人の適応力を弱め破綻を来すことになり、またあまりにも弱い刺激は、その人間の発達や成熟を進める働きにならなかつたり、適応力を広げられなかつたりする」と言及しているように、危機的体験の深刻度によっては、成長へ向かわない場合もある。また、長尾・前田（1976）によると、「危機」とは、それをうまく適応的に乗り越えることができると強い自我形成へ向かい、一歩誤ると神経症や精神病、時には非行や反社会的行動などへ向かうことになるというような二面性を有している。

このように、「危機」は展開へも退行へも向かう「分岐点」となり得る。したがって、本研究では、「危機」をプラスにもマイナスにも移行しうる分岐点として捉える。そして、青年期にあたる大学生の、過去に経験した危機を通じた成長の検討を行う。

1990年代以降、それまでの PTSD 研究等の危機に

よるネガティブな結果へ焦点をあてた研究とは異なった、ポジティブな変化に焦点をあてた研究が盛んに行われるようになった（信野，2008）。宅（2005）は、ストレスに起因する自己成長感が生じるメカニズムについて検討を行い、ストレスに対する意味の付与が自己成長感へ影響を与えることを明らかにした。

このような先行研究から、危機的体験を通して成長が得られることは示唆されたが、危機を通じた成長を促進する要因については、未だ明らかとなっていない。そこで、本研究では、危機を通じた成長を促進する要因として、危機体験時における「他者からの受容感」に着目したい。Erikson（1959）は、青年期の発達課題であるアイデンティティの発達は、親密性と密接な関係にあると述べており、人は親密な他者との関わりを通して、自己を問い直し、他者を見つめ、関係性の中から多くのことを学び、成長していくとした。また、南（1991）も、他者との親密な関係によって自己を発見し、他者による受容によって、自己受容が可能になるのではないかと指摘している。このように、他者の存在や、他者からの受容が成長促進要因となりうるとの指摘は多い。しかしながら、実証的に検討を行っている研究は少ない。したがって、本研究では、青年期における危機的体験を通じた自己成長感を促進する要因として、「他者からの受容感」に焦点をあて、その影響について検討することを目的とする。

目 的

本研究では、青年期における危機的体験を通じた成長を促進する要因について検討することを目的とする。その際、「危機」を“プラスにもマイナスにも移行しうる分岐点”として捉える。さらに、悩んだ体験と、その深刻度を問うことで、「危機的体験」を経験したと捉える。つまり、本研究では「悩み体験」を、成長へと繋がる分岐点として位置づける。したがって、危機的体験を、悩み体験と深刻度によって捉える。

また、本研究では、危機を通じた自己成長感を促進する要因として、「他者からの受容感」に焦点をあてる。その際、本研究では、高井（2001）を参考に、「他者からの受容感」を“ありのままの自分が受け入れられ、理解されている感覚”と定義づける。

さらに、本研究では、第二次性徴に伴い、悩みが深まっていくであろう中学時代と高校時代に体験した「危機」について焦点を当てる。したがって、調査対

象となる大学生には、自分の中高生時代に経験した危機的体験を回想してもらい、その当時の主観的な「他者からの受容感」や、そこから得られた「自己成長感」についての回答を検討する。つまり、“プラスにもマイナスにも移行しうる分岐点”となる「危機」に対して、“ありのままの自分が受け入れられ、理解されている感覚”である「他者からの受容感」が、「自己成長感」に影響を与えるのではないと思われる。

また、宅（2005）の先行研究によると、自己成長感が生じるメカニズムは、契機となったストレス体験に、何らかの主観的な意味の付与がなされることによって起こることが示唆されている。この指摘は、危機的体験の深刻度が重要となっていると思われる。つまり、ストレスフルである、深刻度の高い危機的体験に対しては、「意味の付与」によってポジティブな認知を行わなければ、「自己成長感」が得られないことが考えられる。したがって、危機的体験の深刻度が高い場合、「他者からの受容感」は「意味の付与」を介して、「自己成長感」に影響を与えると考えられる。また、深刻度がそれほど高くない危機的体験には、「他者からの受容感」が直接的に「自己成長感」へ影響を与えるのではないと思われる。

したがって、本研究では、「自己成長感」に促進的な影響を与える要因として、「他者からの受容感」を仮定する。そして、「他者からの受容感」は、「意味の付与」を介して間接的にも、直接的にも「自己成長感」に影響を与えると考える。このような仮説に基づき、本研究では、図1に示した危機的体験を通じた自己成長感の要因仮説モデルを仮定し、検討を加える。

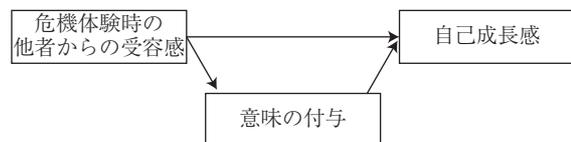


図1 自己成長感に影響を与える要因モデル図

そこで、まずは、青年期における危機的体験としての「中高生時代の悩み体験」の深刻度について尋ね、その傾向について把握する。そして、先に述べたように、危機的体験を通じた成長感に促進的な影響を与えると考えられる要因について検討することを本研究の目的とする。

方 法

1. 調査対象者および調査時期

2012年6月から7月にかけて、男女大学生515名を対象に調査を実施した。このうち、回答に欠損のあるものや不備のあるものを除き、合計460名（男性255名、女性205名）の有効回答を得た。

なお、本研究では、青年期の危機的体験と自己成長感について検討するため、「特に悩むことはなかった」と回答した27名を除外した合計433名（男性234名、女性199名：平均年齢20.23歳、 $SD = 1.42$ 歳）を分析対象とした。

2. 調査方法

本調査は質問紙を用いて、大学の講義時に実施した。なお、本調査は、甲南女子大学研究倫理委員会の承認を得て行われた。

3. 質問紙の構成

(1) 個人属性

質問紙調査への協力のお願いとプライバシー保護について明記し、回答者の基本属性として、性別と年齢を尋ねた。

(2) 危機的体験の測定

大学生に危機的体験を問うことから、質問段階で危機が過去である必要があるため、危機的体験を中学生から高校生の期間に限定した。そして、その間に体験した危機的体験である悩みの内容と深刻度を、悩みの領域別に尋ねた。悩み体験の領域は、宅（2005）によってカテゴリー化された『自分自身のこと』、『家庭・家族のこと』、『学校のこと』、『人間関係のこと』、『その他』からなる5つの危機的体験領域を用いた。そして、これら5つの危機的体験領域から、「あなたが中学生から高校生の間で、悩んだと思う出来事とはなんですか」と質問し、それぞれのカテゴリーに対し、悩みの程度を、「ほんの少しだけ悩んだ」から「かなり強く悩んだ」の5件法で回答を求めた。また、5つのカテゴリーとは別に、「特に悩むことはなかった」という項目を設けた。

(3) 危機的体験時の重要他者の有無

上記で特定された「最も悩んだ出来事」を体験していた際、「支えとなった人」が「いた」回答者には、『母親』、『友人』など、10個の選択肢の中からあてはまるすべての番号に○をつけてもらった。

(4) 他者からの受容感

高井（2001）によって作成された存在受容感尺度を用いる。本尺度は、19項目で構成されており、『他者からの受容感』、『孤独感・疎外感』、『超越力を意識』、『感謝・安らぎ』の4因子構造が確認されている（高井，2001）。ただし、本研究では危機的体験時の存在受容感について尋ねるため、質問項目の語尾をすべて過去形に変更して使用した。また、本研究では、存在受容感尺度の中から、『他者からの受容感』因子のみを使用する。回答は、「全く当てはまらない」から「よく当てはまる」の5件法で求めた。

(5) ストレス体験に対する意味の付与

宅（2005）によって作成されたストレス体験に対する意味の付与尺度を用いる。本尺度は13項目で構成されており、『ポジティブな側面への焦点づけ』、『出来事を経験した自己に対する評価』、『出来事の持つメッセージ性のキャッチ』の3因子構造が確認されている（宅，2005）。回答は、「そのような変化は全く感じていない」から「そのような変化をとても感じている」の4件法で求めた。

(6) ストレス体験をきっかけとした自己成長感

宅（2005）によって作成されたストレスに起因する自己成長感尺度を用いる。本尺度は30項目で構成されており、宅によって一因子構造が確認されている。「ストレス体験をきっかけとした自己成長感」とは、「ストレスフルな体験の前後で、青年自らが心理的に成長したと感じる主観的な自己成長感」と定義されている（宅，2005）。回答は、「そのような変化は全く感じていない」から「そのような変化をとても感じている」の4件法で求めた。

結果と考察

1. 危機的体験について

“中学生から高校生の間で悩んだと思う出来事”について、5つの危機的体験カテゴリー別で平均値と標準偏差を算出した（表1）。その結果、「自分自身のこと」についての悩みが最も高かった。これは、青年期

表1 悩みカテゴリーの記述統計量

	平均値	標準偏差
自分自身のこと	3.16	1.56
家庭／家族のこと	2.30	1.73
学校のこと	3.01	1.56
人間関係のこと	2.96	1.70
その他	0.26	0.90

表2 悩み高低群の得点と記述統計量

	平均値	標準偏差
悩み高群 (n=214)	15.92	2.36
悩み低群 (n=219)	8.83	2.59
全体 (n=433)	12.42	4.33

の発達課題であるアイデンティティの確立への模索である“自分探し”が成されている為であると考えられる。

次に、悩みの深刻度による比較検討を行うため、得点化した危機的体験の5つのカテゴリーを足した総点(最大値25点, 最小値1点)を回答者別に算出し、平均値と標準偏差を求めた。さらに、平均値を基準として、回答者を高群と低群にわけ、高群と低群の平均値と標準偏差を算出した(表2)。

2. 危機的体験時の重要他者について

“最も悩んだ出来事”を体験していた際に、“支えとなった人”がいたかを尋ね、いた場合は提示した人物カテゴリーの中から複数回答させた。その結果“支えとなった人”がいたと回答したのは有効回答者433名中、355名であった。有効回答者全体における、支えとなった人の人数の平均値は1.88人($SD = 1.53$)であった。また、支えとなった人物では、「友人」が最も多く、次いで「母親」が多かった。支えとなった人数の内訳と、支えとなった人物の内訳を図2と図3に示す。

青年期は、両親から心理的に離乳する「第二の個体化(Bros 1962 野沢訳 1971)」の時期とされており(阿部・田嶋, 2004)、自立へ向かうために、自分を模索し、葛藤が生じやすくなる。つまり、危機的体験時に、“支えとなった人物”の中で、「友人」が最も高く、次いで「母親」が高かったのは、回答者の青年らが「第二の個体化」に向かっているためだと考えられる。それまで、一番の愛着対象であった「母親」を離れて「友人」との仲間関係を築きながらも、葛藤を伴うために、「母親」の支えも継続して重要な位置を占めていると思われる。そのため、「友人」と「母親」の両者の人数が、危機的体験時に“支えとなった人”の多くを占めたのではないかと推測される。

3. 各尺度について

(1) 他者からの受容感

本研究では、危機体験時の存在受容感を問うために質問項目を全て過去形に変更して使用した。したがっ

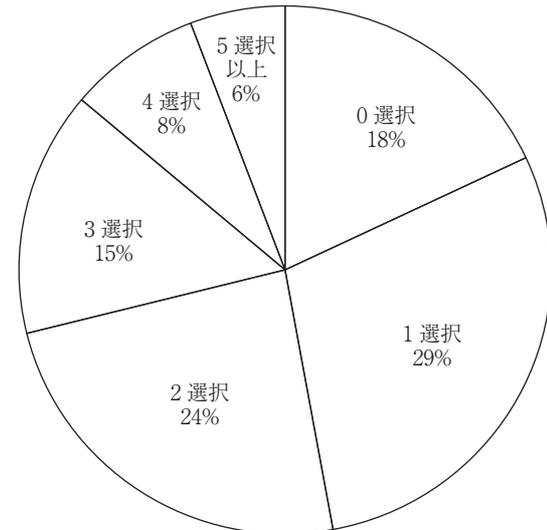


図2 支えとなった人物カテゴリーの選択数の内訳

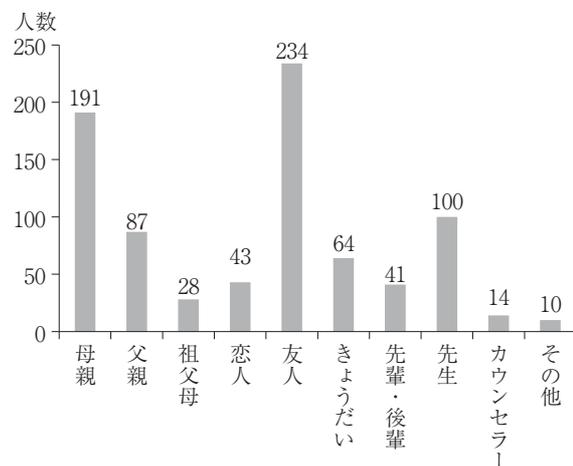


図3 支えとなった人物の選択人数

て、因子構造を確認するため、先行研究に基づき、存在受容感に関する19項目の質問項目を用いて因子分析(最尤法, プロマックス回転)を行った。因子負荷量を表3に示した。

第1因子は、「私には私がつらい時や悲しい時に慰めてくれる人がいた」という項目をはじめ、他者からの受容感を表す項目と、「私はいろいろな人のおかげで今日までやってこれたのだと感謝していた」などの感謝を表す項目で構成されていた。これは、先行研究の「他者からの受容感」因子と「感謝・安らぎ」因子がまとまった結果となった。本研究では、感謝や安らぎも他者からの受容感を構成する要因であると考え、第1因子を『他者からの受容感』と命名した。第2因子は、疎外感や孤独感を表す項目で構成されており、先行研究に従い『孤独感・疎外感』と命名した。第3因子は、見えない力の存在を感じることを表す項目で構成されており、先行研究に従い『超越力を意識』と

表3 存在受容感尺度の平均点とSD および因子分析結果 (Promax 回転後の因子パターン行列)

	I	II	III	平均点	SD
『他者からの受容感』(α=.91)					
14. 私には私がつらいときや悲しい時に慰めてくれる人がいた。	.839	.127	-.026	3.55	1.11
11. 私には私をあたたく見守ってくれる人がいた。	.819	.020	-.027	3.85	1.07
17. 私には私の個人的問題について話し合える人がいた。	.754	.026	-.039	3.60	1.15
16. 今までの人生において、人にあたたく包まれている安らぎや喜びを感じたことがあった。	.731	.043	-.050	3.74	1.05
5. 私には心から信頼し合える人がいた。	.721	-.068	-.045	3.57	1.23
7. 私には、家族や他人を問わず、ありのままの自分を受け入れてくれる人がいた。	.700	-.072	-.013	3.59	1.18
1. 私には私を理解してくれる人がいた。	.698	-.093	.021	3.60	1.16
10. 私はいろいろな人のおかげで今までやってこれたのだと感謝していた。	.594	.055	.139	3.60	1.20
19. 周囲の人たちは、あたたくい心で私に接してくれているように感じていた。	.575	-.216	-.001	3.56	0.98
4. 私は日常生活のささやかなことにでも、感謝の思いがあった。	.484	.057	.258	2.95	1.17
『孤独感・疎外感』(α=.88)					
6. 私は人から拒否されることが多いと感じていた。	.061	.914	-.002	2.37	1.14
2. 私は、無視されることが多いと感じていた。	.077	.889	-.038	2.19	1.12
8. 私は孤独でさびしいと感じていた。	.057	.719	.015	2.75	1.29
15. 私の周囲には心を許しあえる人がほとんどいなかった。	-.339	.522	.027	2.22	1.15
12. 私は誰からも愛されたことがないと感じていた。	-.276	.466	.005	1.95	1.07
『超越力を意識』(α=.89)					
9. 私は、何か大きな力(神様, 仏様, 大自然など)によって守られていると感じていた。	-.035	-.054	.945	2.01	1.20
13. 私は、何か大きな力(神様, 仏様, 大自然など)によって、ありのままの自分が全面的に受け入れられていると感じていた。	-.011	-.033	.826	1.87	1.06
3. 私は、何か大きな力(神様, 仏様, 大自然など)によって生かされているのだと感じていた。	.052	.073	.813	1.94	1.19
因子間相関					
	-	-.606	.237		
		-	.044		
			-		

注) 最尤法により因子を抽出した。

表4 ストレス体験に対する意味の付与尺度の平均点とSD および因子分析結果 (プロマックス回転後の因子パターン)

	I	II	III	平均点	SD
『ポジティブな側面への焦点づけ』(α=.90)					
1. このことは、それもそれでいい機会だったなと考えた。	.911	.001	-.102	3.02	0.95
2. このことに、何か良い面もあったかもしれないと思った。	.831	-.034	-.036	2.83	1.02
4. これは、自分にとって、大切な経験になった。	.806	-.071	.104	3.04	1.01
3. この経験から、何か得るものがあった。	.790	.005	.009	3.13	0.91
5. この経験のおかげと思うようなことがあった。	.578	.163	.161	2.60	1.08
『出来事を経験した自己に対する評価』(α=.82)					
7. こういう経験をした自分をほめてあげたいと思った。	-.092	.996	-.065	1.89	1.00
6. こういう経験をした自分のことを、自分でもすごいと思っている。	.049	.792	.016	2.04	1.03
8. この時のことは、自分の中でも、よく頑張った方だと思う。	-.004	.553	.028	2.61	1.03
9. この経験が、自信になっていると思う。	.289	.437	.154	2.52	1.05
『出来事の持つメッセージ性のキャッチ』(α=.82)					
11. このことは、何か自分へのメッセージがあった。	-.018	-.021	.902	2.48	1.00
10. このことは、人生や生き方について考えてみなさいというメッセージだと思った。	-.006	-.040	.801	2.52	1.05
12. このことは、自分らしさについて考えてみなさいというメッセージだと思った。	.049	.089	.615	2.33	1.01
因子間相関					
	-	.476	.581		
		-	.460		
			-		

注) 主因子法により因子を抽出した。

命名した。

(2) ストレス体験に対する意味の付与

因子分析(主因子法, プロマックス回転)により、ほぼ規定の因子どおり、「ポジティブな側面への焦点づけ」、「出来事を経験した自己に対する評価」、「出来

事を持つメッセージ性のキャッチ」の3因子を抽出した(表4)。なお、「13. このことには、何か意味があったのではないかと思った」項目に関しては、第1因子と第2因子ともに因子負荷量が.40以上あったため除外した。

表 5 ストレス体験をきっかけとした自己成長感尺度の平均点と SD および主成分分析行列

	I	平均点	SD
8. 成長しているという手応えを感じた。	.693	2.92	.87
22. 精神的に強くなった。	.692	3.15	.83
26. 出来事のいい面にも目を向けるようになった。	.681	3.04	.79
24. 心が広がった。	.679	3.07	.84
18. 自分がいい方向に変わったと感じた。	.678	2.96	.88
7. 前向きに、物事を見るようになった。	.676	2.89	.91
29. 相手の気持ちや立場を考えながら自分の意見を述べるようになった。	.660	3.07	.80
13. 根性がついた。	.642	2.92	.92
21. 人の心の痛みが分かるようになった。	.637	3.06	.81
28. いろいろなものの見方をするようになった。	.630	3.22	.71
19. 自分のことを自分で決断する力がアップした。	.625	3.00	.79
23. 友達を大切にしようと思った。	.617	3.31	.79
27. 少し大人に近づいたと実感した。	.615	2.96	.85
3. 自分に自信がついた。	.602	2.60	.89
4. 心配してくれる人がいることを実感した。	.598	3.11	.84
30. 一山、乗り越えたと思った。	.588	2.79	.98
17. この先、どんなことがあってもやっつけようと感じた。	.587	2.46	.92
1. 他人の気持ちを大切にするようになった。	.584	3.27	.74
10. 他人の失敗を許せるようになった。	.582	3.05	.80
11. 他人が困っていたら、自分から手助けするようになった。	.571	2.92	.81
5. がまん強くなった。	.565	3.04	.91
12. 命の大切さを実感した。	.557	2.90	1.00
6. 他人がどう思うかではなく、自分は自分なのだと感じた。	.534	3.06	.87
14. 自分も、この世の中の一員だと実感した。	.529	2.54	.91
9. いろいろなことを考えるようになった。	.510	3.43	.73
25. 自分がどういう人間なのかを考えるようになった。	.459	3.22	.79
20. 世の中には、思い通りにいかないこともあると思うようになった。	.454	3.40	.72
15. キレなくなった。	.429	2.51	.98
16. 自分は、完璧な人間ではないと思った。	.366	3.34	.79
2. 人間を超えた力のようなものがあると思うようになった。	.283	1.96	.95
α 係数 .93			

表 6 悩みの深刻度における平均値と SD および t 検定の結果

	悩み高群		悩み低群		t 値
	平均	SD	平均	SD	
他者からの受容感	3.40	1.06	3.69	.84	3.30**
ポジティブな側面への焦点づけ	3.28	.99	2.56	.92	.78
出来事を経験した自己に対する評価	2.38	1.01	2.16	.89	2.39*
出来事の持つメッセージ性のキャッチ	2.59	.96	2.29	.88	3.44**
自己成長感	3.05	.95	2.89	1.05	1.67

* $p < .05$, ** $p < .01$

(3) ストレス体験をきっかけとした自己成長感

先行研究に従い、主成分分析を実施した(表5)。その結果、「2. 人間を超えた力のようなものがあると思うようになった」項目のみ、第1主成分の値が.35を下回ったが、本研究では、30項目全てを合わせて自己成長感を表すものと判断したため、除外せず使用した。また、先行研究に基づき、本研究においても、第1主成分を『ストレス体験をきっかけとした自己成長感』と命名した。

4. 危機の深刻度における各変数の差について

各変数の平均と標準偏差を算出し、その平均の差について t 検定を用いて検討した(表6)。その結果、悩み低群の方が高群よりも、危機体験時の「他者からの受容感」を高く感じていることが明らかとなった。先行研究によると、人は、他者から認めてもらう経験が、自分を承認できる足掛かりとなり(廣實, 2002)、他者による受容によって、自己受容が可能になる(南, 1991)。また、青年期の親友の存在が、幼少期の家庭でのトラウマを克服できるほどの力を持つとの指

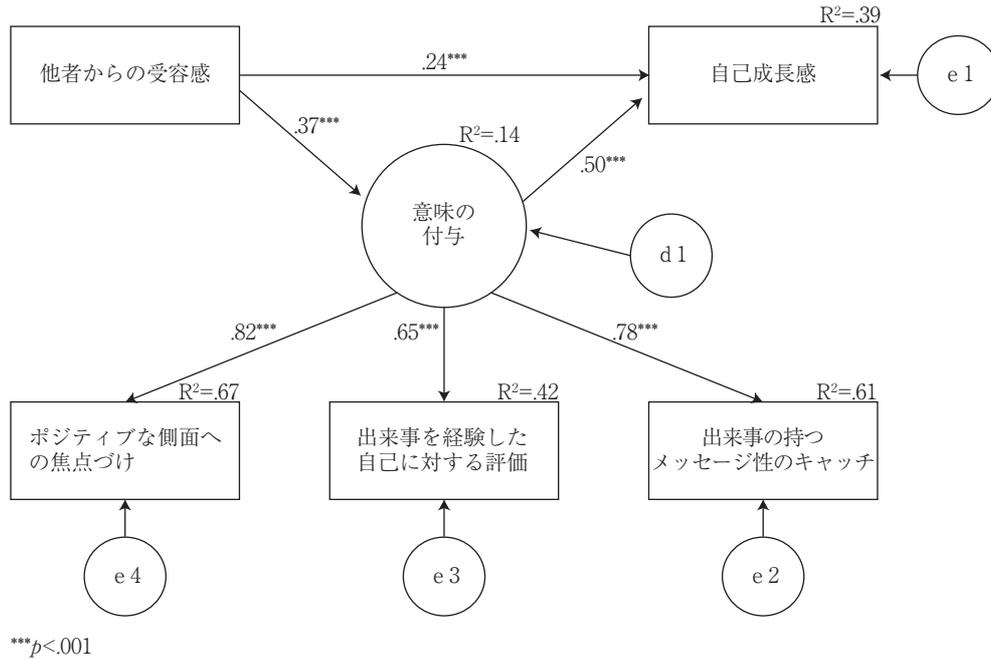


図4 自己成長感に影響を与える要因モデルの分析結果

摘もある (Rubin et al., 1998)。このことから、他者からの受容感を感じることで、自分自身を受け入れ、自分の状況をも受け止めることができるようになると推測される。したがって、危機体験時における「他者からの受容感」を強く感じることは、悩みの深刻度を緩和するのではないだろうか。

5. 危機的体験を通じた自己成長感の要因モデルの検討

各変数における関連を検討するため、自己成長感尺度と他者からの受容感尺度、意味の付与尺度の3因子における相関係数を算出した。その結果、全ての変数間で、有意な正の相関が認められた。そこで、図1に示した危機的体験を通じた自己成長感の要因仮説モデルの検討を行った。

図1の仮説をパス図で表現し、「他者からの受容感」が「自己成長感」に与える影響について、共分散構造分析を用いて検討した。その結果、適合度は $\chi^2(4) = 12.63, p = .013, GFI = .99, CFI = .99, RMSEA = .07$ であった。また全てのパス係数は有意であった(図4)。さらに、ソーベルテストによって媒介効果を検討した結果、「他者からの受容感」が、「意味の付与」を介して、「自己成長感」に影響することが確認された($z = 4.72, p < .001$)。つまり、「他者からの受容感」は、危機的体験を通じた「自己成長感」へ直接的にも、「意味の付与」を媒介して間接的にも、影響を与えることが示唆された。

本研究の結果によると、悩みの低群は高群に比べて「他者からの受容感」の得点が高かった。これは、何を危機と捉えるかは、その人のおかれた環境や身体的、精神的状況によって変わってくる(宮田, 2001)ことが関係していると考えられる。つまり、「他者からの受容感」を感じている場合、危機的体験を経験していたとしても、「他者からの受容感」によって緩和され、安定した精神的状況や環境を作れるのではないだろうか。それによって、「他者からの受容感」を感じている青年は、安心して、危機的体験へ立ち向かえるのではないかと考えられる。したがって、他者からの受容感を感じられることが、成長を促進する要因となると考えられる。

今後の課題

本研究は、過去の危機的体験を測定するといった回顧調査を用いた。そのため、回答やデータの信頼性にバイアスが生じた可能性がある。また、本研究で用いた「存在受容感尺度」は、本来、現在進行形で使用する尺度であるため、今後、過去の危機的体験時の「他者からの受容感」を測定する尺度の開発が必要であると考えられる。

また、本研究では、悩みの深刻度を、5つのカテゴリーに対する得点の総点によって測定した。しかしながら、これら5つのカテゴリーの悩みは、質的に異なるものであるとも考えられる。したがって、今後は、

悩みの質的な検討を加えたうえで、危機を通じた成長を捉えていくことが必要であると考ええる。

引用文献

- 阿部悦子・田嶋誠一(2004). 青年期における「悩み方」の過程に関する研究－体験的距離と心的構えの視点から－. 九州大学心理学研究, 5, 229-237.
- Blos, P. (1962). *On adolescence: A psychoanalytic interpretation*. Free Press: New York. (野沢栄司訳(1971) 青年期の精神医学. 誠信書房)
- Erikson, E. H. (1956). The problem of ego identity. *Journal of the American Psychoanalytic Association*, IV.
- Erikson, E. H. (1959). Identity and The Life Cycle. *International Universities Press*. (小此木啓吾訳編(1982). 自我同一性－アイデンティティとライフ・サイクル. 誠信書房)
- 福森崇貴・小川俊樹(2009). 青年期における不快情動との直面を促進する要因に関する検討. パーソナリティ研究, 18(1), 12-20
- 廣實優子(2002). 現代青年の交友関係に関連する心理学的要因の展望. 広島大学大学院教育学研究科紀要(3), 51, 257-264.
- 小島操子(2008). 看護における危機理論・危機介入 改訂2版. 金芳堂.
- 町沢静夫(1988). 発達とストレス 青年心理 特集『ストレス』. 67, 12-21.
- 南博文(1991). 人格の発達 今泉信人・南博文(編) 人生周期の中の青年心理学. 北大路書房.
- 宮田義勝(2001). 中年期の自我同一性の発達. 大阪教育大学発達人間学講座・発達人間学論叢(4), 53-63.
- 長尾博・前田重治(1976). 同一性障害の分類の試みとその臨床的意義について. 九州大学教育学部紀要(教育心理学部門), 21, 1, 15-24.
- 信野良太(2008). 自己成長感尺度作成の試み. 北星学園大学大学院社会福祉学研究科北星学園大学大学院論集, 11, 125-136.
- Parad, H. J. (1965). *Crisis intervention, selected readings*. New York: Family Service Association. (岡堂哲雄編(1979). 心理臨床入門. 新曜社.)
- Rubin, K. H., Bukowski, W., & Parker, J. G. (1998). Peer Interactions, Relationships, and Groups. In W. Damon, & N. Eisenberg (Eds.), *The handbook of Child Psychology, Fifth Edition, Vol.3: Social, emotional, and personality development*. John Wiley & Sons, Inc. 617-700.
- 下山晴彦(1998). 青年期の発達 教育心理学Ⅱ発達と臨床援助の心理学. 東京大学出版会.
- 鎌幹八郎(1988). 青年の同一性(アイデンティティ) 青年心理学ハンドブック. 福村出版.
- 高井範子(2001). 他者からの受容感と生き方態度に関する研究－存在受容感尺度による検討－. 大阪大学教育学年報, 6, 245-254.
- 宅香菜子(2002). 思春期自我発達の促進要因に関する理論的検討－ストレス体験過程の積極的意義に着目したモデル構築の提案－. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要. 心理発達科学, 49, 169-179.
- 宅香菜子(2005). ストレスに起因する自己成長感が生じるメカニズムの検討－ストレスに対する意味の付与に着目して－. 心理臨床学研究, 23(2), 161-172.